

次郎長

題字 竹内宏

次郎長翁を知る会
会報「次郎長」
44号
令和7年6月1日発行
発行/編集
次郎長翁を知る会
会長 府川充宏

「新交」そして「親交」 実り多き一年に感謝！

次郎長翁を知る会 会長 府川充宏

次郎長翁を知る会の会員の皆様、当会に永年御在籍下さり、御協力下さり、誠に有難うございます。心より御礼申し上げます。今後ともお力添え賜りますようお願い申し上げます。

省みまして、この令和六年は素晴らしい年でもございました。新しい団体との交流。これまで当会とお付き合いのあった諸団体との深きを増した交流。こうした外部とのお付き合いだけでは無く、地元静岡・清水の人々に、次郎長さんを再度知って頂くアピール活動などを活発に行いました。

次郎長さんの第一の子分でした「大政」の故郷である愛知県常滑市大野より、大野コミュニティの皆様が次郎長関連史跡の視察で清水を訪れ、当会の役員

で案内同行したことに始まり、六月には、以前より交流のある千葉県原市の、鶴舞藩を知る会様より講演会のご招待を賜り、副会長の山本氏と監事の杉本氏の二名で参加させて頂きました。

鶴舞藩にゆかりのある伏谷如水さんは、幕末維新の混乱期に、治安の要である東海道と清水港の警固役として俠客の次郎長を抜擢。アウトローだった次郎長さんを天下の公道へとすくい上げ、のちに「世の為人の為に生きた次郎長さん！」と成るきっかけを与えてくれた恩人様です。

如水さんとのご縁で、次郎長翁を知る会と鶴舞藩を知る会との交流が始まり、『伏谷如水と清水次郎長ノ記念碑』が鶴舞公民館の敷地に建立。また清水の船宿



記念館末廣敷地内に『次郎長清水港警固之碑』（右写真）が、如水さんの五代目子孫で市原市在住の高石鶴子様の御寄贈で建てられるなど、維新で生まれた二人の縁と功績を後世に伝える顕彰活動を互

いに続けてまいりました。

この度、鶴舞藩を知る会の新会長の塚原様による歴史講演会「維新の陰の功労者 鶴舞藩家老と俠客を追う 伏谷如水と清水次郎長」へお招き戴いたことは、何かとても大切な心の遺産の継承というような気持ちに致します。信頼とか協力とかは一朝一夕で生まれるものではなく、お互いに尊敬し、感謝し、尽くす事の有様で生まれると思う処です。

令和六年度はその他にも、多くの団体様との交流があった一年でした。どうぞ本紙の各記事を御高覧賜りたく、宜しく御願ひ申し上げます。

市原「鶴舞藩を知る会」 歴史講演会開催される

次郎長翁を知る会 監事 杉本憲一

令和六年六月二日（日）千葉市民会館で、千葉県立市原高校同窓会による歴史講演会が開催された。当会から山本副会長と杉本監事が来賓として出席した。

講演は当会と提携し親交永い「鶴舞藩を知る会」会長（当時事務局長）で歴史研究家の塚原茂氏。演題は『伏谷如水と



清水次郎長「維新の陰の功労者」鶴舞藩家老と俠客を追う」。

八十名を超す聴講者が、塚原茂氏の迫力ある講演に聴き入った。

——慶応四年、浜松藩の家老だった如水は、代々仕えてきた徳川の支配に代わる駿府（現在の静岡市）の治安責任者の差配役に任命された。如水はこの任を、俠客であった清水次郎長を抜擢し帯刀を許して、治安の要衝である清水湊と東海道街道筋の警護役に登用した。これを契機に応えた次郎長は、社会に尽くす道を歩み始めたことと伝えられる。如水は山岡鉄舟等と並び、次郎長の晩年の生き方に大きな感化を与えたひとりであった。

如水は明治元年、浜松藩が上総に移封されたのに伴い、鶴舞藩主井上正直公の元で家老として仕えた。

明治二十三年、七十二歳で生涯を閉じた如水の墓所は、居を構えた現在の市原市池和田にある——

塚原氏は御年八十八歳。パワーポイントを駆使して自らが制作した画像資料にて力説。氏が後世へ伝え繋げたい想いと情熱が強く感じられた。



塚原茂氏（中央）を囲んで

鶴舞藩を知る会と次郎長翁を知る会は、平成十二年の二月に鶴舞藩を知る会御一行が清水を訪れたのを皮切りに、同年四月三日に今度は次郎長翁を知る会が市原を訪問して両者の交流が始まった。平成三十年十月二十四日には、府川会

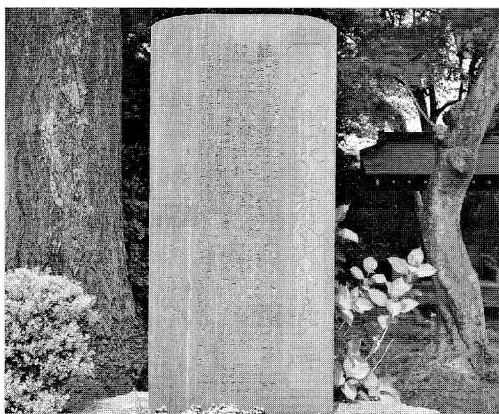
長、往時の山田会長、はじめ「次郎長翁を知る会」の役員、会員十数名がバス一台を任立て、度目の市原訪問を果たした。鶴舞藩を知る会の塚原現会長、角田現事務局長はじめ現地の役員や会員と連れだって、池和田の小高い丘にある伏谷如

水の墓所を参拝し、その後、鶴舞公民館にて、用意戴いた茶話会の席で会員相互が親しく交流し懇談した。

それから約七年。この度の講演への出席は、代表二名であるが次郎長翁を知る会として三度目の市原訪問となった。

鶴舞公民館入口に建つ、竹内宏初代会長題字の『伏谷如水ト清水次郎長ノ碑』の結びには、田口英爾氏撰文で次のように刻まれている。

「次郎長ニトッテ正ニ生涯ノ恩人トモ言ウベキ如水ノ史実ヲ後世ニ伝エルタメ、清水市ノ「次郎長翁を知る会」会員オヨビ市原市在住ノ如水子孫高石鶴子ヲガ相謀リ、ココニソノ由来ヲ刻シ碑ヲ建立スルモノデアル。」



伏谷如水ト清水次郎長ノ碑

如水と次郎長、市原と清水の絆は続く。

咸臨丸子孫の会の皆様と 壮士墓墓参と交流。 徳川家臣団大会へ参加して

次郎長翁を知る会 副会長 石野源三郎

令和七年四月十六日。清水文化会館マリナートに於いて、徳川みらい学会・徳川家臣団大会が挙行されました。

その会合に参加の為、藤本増夫会長をはじめとする八名の「咸臨丸子孫の会」の皆様が来静され、次郎長翁を知る会と合流して壮士墓の墓参を致しました。咸臨丸子孫の会と当会とのお付き合いは、平成三〇年九月十七日に行われた『咸臨丸事件・壮士墓建立二五〇年記念事業』に会員の皆様が全国から参加されてからのことですが、この度も多額のご供養をいただくなど、子孫の会の皆様がこの地のことを非常に大切に思ってお下さっていることに感謝し、喜びに堪えません。

慶応四年の戊辰戦争の折、幕府と官軍との戦いで命を落とされた咸臨丸の乗組員を次郎長さんが埋葬し、壮士墓を建てて供養いたしました。

次郎長翁を知る会では、次郎長さんの

義孝と戦没者に対する慰霊の精神を引き継ぎ、役員が中心となって春の彼岸日



壮士墓にて咸臨丸子孫の会の皆様と

と、命日の九月十八日の年二回に墓域の清掃と供養を行なっています。また次郎長さんを社会事業家へと導いた山岡鉄舟さんと出会うきっかけとなった出来事とこの壮士墓を「次郎長さんの聖地」と捉え、日ごろより当会がこの史跡の維持管理を行っております。

午後の徳川家臣団大会には、わたくし石野と山田運営委員の二名で参加させて

いただきましたが、会場内で咸臨丸子孫の会の尾駒様より「ここですよ」と手招きされて咸臨丸子孫の会の席に着きました。



先ず、小和田哲男会長（静岡大学名誉教授）及び徳川十九代宗家の家広様のご挨拶の後、全国より参加されました家臣団の紹介があり、咸臨丸子孫の会の紹介のあとに司会の方が「次郎長翁を知る会」の名を呼び上げて下さいました。予測もしなかった突然の出来事に驚きましたが、起立して挨拶を致しました。大変光栄でございました。

講演は小和田氏と太田浩司（東海歴史文化研究所）所長による『真説関ヶ原の戦い』との御題でした。

終了後、家臣団の皆様は、静岡の浮月楼での交流会に参加するとの事。私たちは不参加の為、此れにてお別れ致しましたが、晴天にも恵まれ、佳き再会の日となりました。

愚庵会主催

『いわき市民交流講演会』で講演

次郎長翁を知る会 副会長 山本量正

昨年（二〇二四年）の十月十九日（土）、福島県いわき市の市民文化センターで開かれた「いわき市民交流講演会」に、主催者である「愚庵会」（地元の偉人「天田愚庵」を顕彰している団体）の招きにより、『清水の近代化に貢献—知って欲しい清水の次郎長』という演題で講演してきました。



いわき市は、福島県の太平洋沿岸南部に位置する市で、いわゆる「浜通り」地域の行政・経済・文化の中心地です。そして、「次郎長翁」の名をその著書『東海遊侠伝—名次郎長物語』で日本全国に喧伝し、一躍有名にしてくれた「天田愚庵」の故郷です。

天田愚庵については、これまでも山田捷司前会長による末廣での「次郎長巷談」や、会報への寄稿文でご存じの方も多いと思いますが、幕末のいわき平藩士の家に生まれ、戊辰戦争に敗れた後、父母妹を探す遍歴の途中に山岡鉄舟の紹介で次郎長に預けられ、一時は養子となり親子の縁を結んだ間柄です。

次郎長に身を寄せた頃から「東海遊侠伝」を執筆し、また、富士山麓の開墾にも尽力しました。漢詩や和歌に優れた禅僧で、俳人の正岡子規とも交流がありました。

この天田愚庵を顕彰する「愚庵会」とは、「知る会」発足当初の平成四年十二月に第一回研修旅行としていわき市を訪問し、京都の伏見から移築された「愚庵邸」を案内していたなど交流が始まりました。翌年には愚庵会と一行が清水に来訪し、梅隆寺境内に愚庵の歌碑が建立されました。その後もお互いが行き来を重ね交流を深めてきましたが、私

も、今から5年前の平成二十一年に、今は亡き竹内宏会長、田口英爾会長補佐、山田捷司会長などと一緒に、いわき市を訪問した時のことを懐かしく思い出しました。

講演会当日は愚庵会事務局としてはかなりの参加人数を期待していたようですが、生憎のアクシデントで約2名ほどの参加者でした。

（現在の愚庵会会長は有賀行秀氏とおっしゃる方で、いわき平ロータリークラブの会長も務めておられるなど地元の有力者です。ロータリークラブの会員の皆さんにも講演会参加を呼びかけていただいていたようですが、あいにく、ロータリークラブ会員のかたのご葬儀と重なり、有賀会長ご自身も含め残念ながらご欠席ということになってしまいました。）

講演内容としては、「知る会」の総会や末廣での次郎長巷談での内容を中心に、「知る会」と愚庵会との交流や、現在の清水の紹介などを付加して話しました。ただ、次郎長の時代の清水町や「向島」「三保」などといった地理的な説明、「現在の清水」の状況説明、清水関係の人物紹介など、清水での講演であれば「単語一つ」でわかっていただける事

柄に時間を要してしまったり、次郎長のことを少しでも多く知ってもらいたいとあれやこれや盛りだくさんにしてしまつて、一時間三十分の予定が二時間近くになってしまいました。

それでも「次郎長の功績がよくわかった」とか、清水に親戚がいるとか、行ったことがあるという人もおられて、参加の皆さんには熱心に聞いていただけたと思っています。

これからも「愚庵会」の皆さんたちと交流を続けていきたいと思っています。



いわき市民文化センターにて 講演会の模様

研修旅行

『遠州磐田 次郎長ゆかりの人物の足跡・史跡を訪ねて』に参加して

次郎長をよめる会 運営委員 山田光徳

令和六年十月九日。今回のテーマは、次郎長ゆかりの人物「松岡萬（よろず）」の足跡を訪ね遠州の磐田市周辺を廻る旅。朝起きての大雨で、どうなることかと心配しましたが、午後には晴れるという天気予報通りに十七名のメンバーを乗せてバスは出発しました。

最初の目的地は、松岡萬を中心に旧幕

臣や家族が静岡に移住して生活のため切り開いたという湊浜製塩所跡地を見学しました。乗用車がやっと通れるくらい、道をマイクロバスで踏み入った先には、当時の姿を少年時に見た古老が回想で画した絵図と解説の看板が静寂に立っていました。事業は雨の多い土地柄であったことに加え、武士の慣れない仕事で次第

に土気も低下し、わずか二年で廃業したという事でした。

次に漆喰面技法で名高い入江長八の作品である「次郎長肖像画」が残る塩新田公民館を訪ねました。次郎長と入江長八の接点は研修の資料によると山岡鉄舟が引きあわせたようです。公民館では地元在住で郷土の歴史に詳しい大橋幸生様はじめ自治会の皆様が温かく迎えて下さりました。肖像画がここに残る経緯は、次郎長が大勢の子分に食べさせる食糧に困っていたときに、これを聞いた清水で「ヤマ源マッチ」の製造をしていた鈴木氏が、故郷の福田から米を送って援助した縁で、次郎長が塩新田を訪ね、その時贈られたとのこと。現在は、この公民館で保管しているという話をお聞きしました。

またこの地域は浜松藩の飛地であったことや周りが河川で囲まれている土地柄であるため独自の文化があったようです。次郎長が生きた時代は遠州灘に面しイワシ漁に使う船の帆の製造が現在のベッチン・コールテンの地場産業に繋がっているという興味深いお話しもされました。良き交流の時間でありました。

続いてバスは松岡萬を祀る池主神社

(松岡霊社)へ向いました。ここでも安倍様をはじめ地元中大原の自治会の方々歓迎と解説を承りました。松岡萬という人物は幕臣として生まれ尊皇攘夷の思想に共鳴し徳川家茂の警護役や浪士組の結成でも中心人物の一人でしたが、明治維新後は静岡藩庁の水利や開墾等の責任者として活躍しました。その折、現在の磐田駅の南に広がる「大池」の埋立てによる水利権めぐる争いがあり、下流域にあたる大原の人々の声を聴き、「大池」の埋立て中止を決定しました。そのことに感謝した村人が松岡を神として祀り「松岡霊社」を建立したものです。今でも地域の人たちは松岡への感謝の気持ちを持ち続け、神社は大事に守られています。

昼食をはさみ近代日本の造船技術の先駆者であり威臨丸にも所縁のある海軍中將の赤松則良の宅地跡の記念館を見学。その後には旧見付学校へと向かいました。館内には徳川家康の窮地を救った「伝酒井の太鼓」が展示され、寄付者の名に博徒時代の次郎長の盟友の大和田友蔵(磯辺友蔵)がある事や、その太鼓が学校の時を告げる役割をした事を学芸員より説明を受けました。その友蔵の菩提寺である今浦山金剛寺へも立ち寄りしましたが、



入江長八作といわれる次郎長肖像画
画像では伝わらないが、現物は漆喰面らしい立体感で迫力ある肖像画だった

戒名も墓石も立派で、侠客の墓というより地元の名士の墓のようでした。

最後に立ち寄った見付天神では、名物の栗餅が製造元が休日であったため購入

できず唯一こころ残りでしたが、国分寺跡や大池にまつわる遠江の話等、磐田市の歴史の奥深さを知る旅でもありました。



磐田市中大原の池主神社（松岡霊社）前にて

松岡 萬

よろず

生祀となった旧幕臣と次郎長

次郎長翁を知る会 運営委員 中田 元比古

博徒だった次郎長を社会事業家として正道に導き、彼の後半生に大きな影響を与えた人物は？と尋ねれば、間違いなく誰もが「山岡鉄舟」と答える。そして鉄舟が次郎長を知るきっかけになった出来事と言えば「咸臨丸事件（明治元年九月十八日）」であり、詰問する鉄舟の前で「死ねばみな仏。仏に官軍も賊軍も無

い」と啖呵を切る次郎長に惚れ、以降両者は生涯親交を続けた！という画像が脳裏に浮かぶ。印象的には決して間違っていないが、実際に事件当事者の次郎長に直面し、その振舞い、人となりを見て魅かれ、鉄舟に引き合わせた人物がいると言われる。それが松岡萬だ。（以下、松岡と略称）



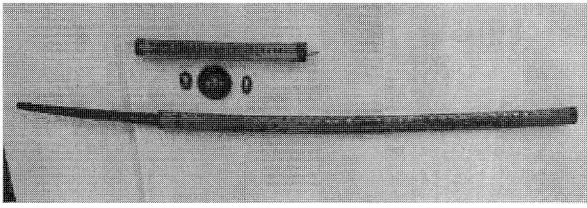
写真は浪士組として京都に上洛した頃の松岡萬

後に、徳川慶喜の護衛役を務めた新門辰五郎を次郎長に引き合わせ、護衛役を引き継ぎさせたのも松岡と言われている。鉄舟没後の静岡邸宅の処理などを次郎長に託すなど、松岡が鉄舟同様に次郎長に信頼をおき、様々な場面で両者は密接な関係であったと思われる。

その松岡が明治維新で駿府・静岡に来て、混乱期の藩政を安定させるために働き、地元の民に生祀という存命中の人間が祀られる祭神とまでされた事はあまり知られてはいない。

松岡は、幕末の動乱期に將軍家茂の上洛の護衛隊であった浪士組取締役に抜擢されるなど、武術に卓越していた。蒲

生重著者の『松岡萬伝』に「其性勇壯頗る武芸に達し、常に白櫛朱鞘の大刀を佩び、又刃渡り二尺の大長巻平生左右を離す事無し」とあり、その長太刀が松岡のトレードマークだったようだ。



松岡萬の朱鞘の長刀 (磐田市中央図書館所蔵)

生涯

松岡は天保九年（一八三八）代々鷹匠組頭をつとめる家に生まれた。安政五年十九歳の頃、清川八郎・山岡鉄舟と出会う。松岡は幕臣であるが猛烈な尊王攘夷論者で、両者と共感し盟友となる。清川八郎が結成した『虎尾の会』にも参加した。文久三年（一八六三）將軍家茂の上洛の警護を目的に結成された浪士組に参加。清川暗殺後、再編成された「新微組」の浪士取締役の一人となる。

慶応四年（一八六八）二月十二日。鳥羽伏見の戦いで敗走し上野寛永寺へ謹慎した徳川慶喜を、松岡は山岡鉄舟らと共に警固。七月二十三日。徳川慶喜の精鋭隊として勝海舟・山岡鉄舟らと共に謹慎していた水戸から駿府入りを護衛した。同年九月八日に元号が明治となり、精鋭隊は新番組と改称。頭の中条金之助らと共に松岡は頭並として慶喜の近辺、久能山の警備などにあたり、勝と山岡は幹事役として駿府藩政と江戸の残処理にあたった。清水湾内で咸臨丸事件（九月十八日）が起きたのは、このように駿府周辺が、江戸からの幕臣移民や政治的混乱状態の最中のことだった。

明治二年（一八六九）新番組は牧之原



明治時代に撮影された松岡萬

等の開墾方となり、中条を頭に松岡は頭並に任命される。同年九月。静岡藩庁の組織体制が整い、家老平岡丹波守を大参事とし、藩政補翼に大久保一翁と山岡鉄舟。以下「十掛」が置かれ、その中の「水利路程掛」に松岡が任命された。この年の十二月。清水湊の廻船問屋松本屋敷にて、新門辰五郎と次郎長が徳川慶喜の警固の引継を行なった。ここで両者を引きあわせたのが松岡といわれている。

県下に残した松岡の功績

明治三年（一八七〇）二月。松岡は山名郡湊村の製塩局の頭取に任命され、新門辰五郎の協力も得て、二〇〇名を率いてこの地を開墾する。「水利路程掛」の松岡が遠州に居ることを聞きつけ、水利抗争でもめる付近の村民が松岡に救済を求めた。同年の三月に藤枝蓮華寺池開拓を巡る村同士の抗争に携わり、十一月に

は遠州中泉の大池の開拓を巡る村同士の抗争に携わった。この争いは、大池を所有する二之宮村が池を埋め立て耕地にする計画に対し、池の水を灌溉利用していた大原・南田地域の村人が池の埋め立てを反対して対立した抗争で、大原側の総代五人が捕えられる事件が起きている。松岡は大原側の村民の訴えを聞き入れて検分をした結果、大池の埋立てを中止させた。

この裁決に大原・南田地域の人々は大いに感激して、明治九年に池主神社へ松岡を生き神とする「松岡霊社」を建立し感謝の意を表した。明治四年には、安倍川への新橋架橋（安永橋Ⅱ現在の安倍川橋）に携わり、同年に藤枝岡部宿と隣村の廻沢村への入会地を巡る争いを仲裁。廻沢村民も村を救った恩人を祀り飛龍神社内に「松岡神社」を建立した。藤枝蓮華寺池の抗争についても開拓の中止を英断し長年の抗争を終結させた。この遠州中泉、岡部町、藤枝の三件の争いで松岡は、いずれにおいても利権者側よりも、弱い立場の人たちの意見に耳を傾け、公正な判断をくだしている。こうした精神は次郎長にも共通したものがあり、それが両者の関係構築の根幹にあったのであろう。

維新により混乱する藩政と民との間を仲立ちし、当地方の近代化への流れを円滑にした松岡の働きは、決して目立ちはないが評価されるものがある。

明治八年（一八七五）には東京警視庁に出仕し、明治十年に警視庁一等大警部となる。

明治二十四年（一八九一）三月に病死。行年五十四歳。幕末維新を駆け抜ける人生だった。山岡鉄舟が建立した東京谷中の全生庵に眠る。

松岡の塩田事業

湊浜製塩所について

徳川幕府崩壊により、多くの幕臣とその家族らが静岡に移民としてやって来た。禄を失った幕臣たちの生活を支援するための殖産事業として、静岡藩は茶の生産とともに製塩事業を試みた。明治三年（一八七〇年）二月。松岡は製塩頭取に任命され、部下とその家族約二〇〇名が山名郡湊村（現磐田市豊浜）へ移住。松林に横須賀城の長屋を解体移築し、葦の茂る低湿地帯を拓き塩田をつくった。事業の計画は、東は中新田から西は太田川を境に広さ二町歩ほどの塩田を造り、縦横の堀を廻らして太田川の河口から差入る潮水を引入れて汲んだ。製塩する為

の燃料である薪は、三沢山の下げ渡しを受けて山の松木を伐りだした。

施設内には瓦葺きの建物十四棟を建て、二番を事務所、一番、三番から十四番は製塩方の住居として一棟に六世帯が割り当てられた。松岡らと共に江戸から徳川慶喜を護衛してきた俠客新門辰五郎は、職を失った江戸浅草の御蔵米小揚げ人足を引連れ十三番長屋に住まわせた。

また、開鍛所（刀鍛冶場）、筆学所（学校）や味噌・酒・日用品などを売る商舎などが出来て、開設一年はとても賑わいがあったという。

しかしこの土地は雨が多く塩田に適さなかったことや、元武士の慣れぬ仕事で次第に土気や調和も低下し、明治五年の廃藩置県による藩内の諸局廃止に伴い、製塩所はわずか二年と短命のうちに廃止された。製塩方の移住者は新たな職を求めて離散し、その多くは江戸へ戻ったという。

やがて長屋の建物は民間に払い下げられた。さらに移築や取り壊されて、現在は塩田の痕跡や面影もなく、「松岡堤」と「お長屋橋」の橋名のみが残る。

塩田があった一帯は現在、メガソーラー（大規模太陽光発電）の土地となっている。

新春連続読み二〇二五

六代目神田伯山の

『清水次郎伝』を聴いて

次郎長翁を知る会 運営委員 北村昭夫

俠客清水次郎長という人間を一般世間に広めた人物は、のちに「次郎長伯山」の異名を取る講談師の三代目神田伯山と、独特の虎造節で人気を博した浪曲師の二代目広沢虎造であろう。

三代目神田伯山は天田愚庵の東海遊俠伝を基にして、義理人情を絡ませた好人物の次郎長像を仕立て上げた。その評判は周田八丁にある奇席の客を奪うほどの人気だったようで、初演四年後の明治四十四年には尾上松之助が主演して映画「清水の次郎長」が上映された。

広沢虎造は伯山の語る次郎長噺に夢中になって奇席へ入りびたり習得した。彼の浪曲はその歯切れの良い芸風がラジオで大受けし、圧倒的な人気で全国的にブームを巻き起こした。そして清水次郎長は一大ヒーローとなり次々と映画化され、坂東妻三郎や月形龍之介など人気俳優が主演を務め一世を風靡する事になる。

今回は人気絶頂の講談師六代目神田伯山が、次郎長所縁のこの清水で「清水次郎長伝」を五夜連続で口演するという願ってもない機会であった。全席指定の五日間通し券しか発売されなかったが、定員二八〇名の小ホールという事も相まって、チケットは入手困難となり早々に売り切れ「満員御礼」の状態となった。更に指定された席は観客が公平になるようにと毎回変わるシステム。もっと大きな会場でも席は埋まったであろうが、この小ホールで開催の意味は深く、実際に最後尾の一番端の席になった時でも臨場感たっぷり、何の違和感もなくジックリと楽しむ事が出来た。

神田伯山は今回の口演のために四か月前に清水を訪れ、次郎長生家や梅蔭禅寺に船宿末廣から壮士の墓など所縁の地を廻り、地元住民の思う次郎長の人物像や次郎長愛に触れたそうである。口演での

枕ではそんな話を織り交ぜながら大いに笑わせてくれた。

初日 一月二十六日

- ・「狼退治」青之丞
- ・「谷風の情け相撲」伯山
- ・「汐留の蜆売り」伯山
- ・第一話「次郎長の生い立ち」伯山
- ・第二話「心中奈良屋」伯山

初日は、まず前講として神田青之丞による『狼退治』を。そして神田伯山がお楽しみ二席として、名力士の谷風が生涯一度の八百長をした『谷風の情け相撲』と、鼠小僧次郎吉の『汐留の蜆売り』の噺で中入りとなった。オヤツ次郎長噺はどこへ行ったの？と思っただが、これからがいよいよ次郎長連続読みの始まりだった。

中入りを挟み、いよいよお待ちかねの第一話は『次郎長の生い立ち』。漁師の息子として生まれ、米屋である山本次郎八の養子となり商売に励むが、大金を盗んで江戸へ立ち去る。そして米屋の商いが傾いた時に、次郎長は大八車に積んだ米俵を届けて家業を救うという噺。

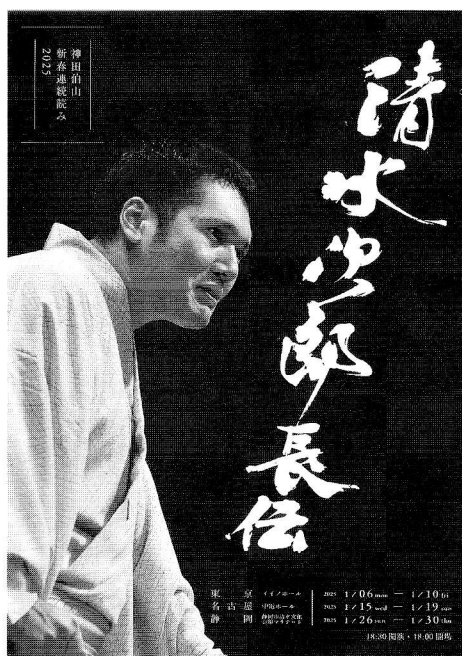
続いた『心中奈良屋』は、次郎長がある老僧に「早くて一年、遅くても三年の死相」だと言われ、人生が馬鹿馬鹿し

くなり博奕打ちとして一步を踏み出すが、有る日博奕の帰りに川へ身投げしようとしている男女を引き止める。ある日次郎長に余命を告げた老僧が再び現れ、次郎長の善行で死相が消えたという人情噺で、第一夜はお開きとなった。

二日目 一月二十七日

- ・巧みな話術と絶妙な問の取り方で、グイグイと講談の世界に引き込み、アツという問の二時間半だった。
- ・第三話「法印大五郎」伯山
- ・第四話「秋葉の火祭り」伯山
- ・第五話「興津河原の間違い・上」伯山
- ・第六話「興津河原の間違い・下」伯山
- ・「法印大五郎」では特異なキャラである大五郎との出会いから始まる。賭博場で邪魔だてし制裁を受けたボロ身なりの大五郎を、次郎長は

救い引きとった。間男騒動に巻き込まれて腹を立て、甲州の竹居安五郎の許から出てきたのだというが、その話の行き先が増川仙右衛門の親の仇討に発展するといつかからやっしい。



『秋葉の火祭り』は、仙右衛門が父の仇である小五郎を討つという秋葉の火祭りの噺である。この騒ぎを聞きつけた津向文吉と天和田（見附）友蔵は次郎長を認め、これを機会に二人は兄弟の盃を交わす。

そして前半のクライマックスである『興津河原の間違い』に続く。次郎長が実の父親のように慕う和田島太左衛門と津向文吉が喧嘩になるといふ噂が立つ。文吉はすでに興津河原まで出てきて一触即発状態。次郎長は双方の事情を訊いてみたらとんだ勘違いで、次郎長は「この喧嘩、私に預からせて下さい」と、興津河原へ向かい文吉にその訳を話し出す。文吉は早とちりに気付き改めて太左衛門に詫言を入れ、伯父と甥の間柄となった。この一件以来、清水次郎長の名は全

国に知れ渡るようになったという噺で今日はお開き。いよいよ次郎長の本領発揮が始まる。

三日目 一月二十八日

- ・第七話「小政の生い立ち」伯山
- ・第八話「羽黒の勘六」伯山
- ・第九話「小川の勝五郎の義侠」伯山
- ・第十話「お蝶の焼香場」伯山

まずは『小政の生い立ち』森の石松を連れてのお伊勢参りの帰り道、博奕の真似事が達者な十二歳の生意気な政吉と出会う。目の前にいるのが次郎長親分だと知ると、「どうか子分にしてくれ」と頼み込む。これが小政との出会いとなる。真っ当に生きると諭す次郎長だったが「もしおっかさんに万が一のことがあったら、自分の所へ来なさい」と言って葉代を渡し別れたが、間もなく母は亡くなり政吉は清水へ。こうして優秀な人材が次々と集まってくるのは、人望が厚い次郎長ゆえの事だからだろう。

次の噺は子分衆とは関係がない『羽黒の勘六』黒駒に頼まれ、次郎長をだまし討ちにする目的で坊主に身を委せて近付いた勘六は、突然次郎長に襲い掛かるが取り押さえられてしまふ。話を聞きその義侠心を認めて身内に誘うが、勘六は断

り立ち去っていへんという哀愁漂う一匹狼の嘶。

このあとは初代お蝶の最期を物語る『小川の勝五郎の義侠』『お蝶の焼香場』と続く。旅に出た次郎長たちは風邪をこじらせ金も使い果たす。そこに通りかかったのが小川勝五郎で、貧乏ながらも二人を手当てするが、お蝶の症状は悪化するばかり。そこで以前世話をした事がある保下田久六の所へ金策に行く。

しかし久六はそんな態度でけんもほろろに断る。手厚い介抱の甲斐もなく、お蝶は翌年元旦にこの世を去ってしまった。本葬は蓮光寺で全国から錚々たる名前の親分衆が参列した。だが本来、真っ先に駆けつけるべき久六と弟分の常滑兵太郎は来ず、逆に代官と結託してお蝶を世話した長兵衛を水牢にて責め殺した。後に次郎長は石松らを従え、その仇を討ったという、映画『次郎長三国志』でもお馴染みの嘶だった。

四日目 一月二十九日

- ・第十一話「お民の度胸」伯山
 - ・第十二話「蛤茶屋の間違い」伯山
 - ・第十三話「三本椎の木お峯の茶屋」伯山
 - ・第十四話「飯田の焼き打ち」伯山
- 今日の第一話『お民の度胸』は次郎長

一家一番の人気者である森の石松の憤死というショッキングな内容で、涙曲でも超有名なストーリーだ。お人好しの石松が、預かっていたお蝶の香典を都鳥の吉兵衛にだまし取られ、拳句の果てに切られてしまう。その時に置ってくれた小松村七五郎の女房のお民が度胸よく、追手の男どもに啖阿を切って蹴散らしてしまふ。ここで終われば目出度し目出度しでスカッとする場面だったが、石松は都鳥の挑発に乗って姿を現し、無残にも切り殺されてしまふ。翌朝、七五郎は石松が殺されたと聞きすくに現場へ駆け付けて、石松の鬚と小指を斬り落として懐に入れ「必ず仇を討つ」と誓う。なんとも血生臭い話で、いかにも任侠の世界らしい結末であった。

次は『蛤茶屋の間違い』という嘶で、神戸の長吉の身内である加納屋利三郎と、安濃徳次郎の身内で上州無宿の熊五郎が、料理屋「みすじ」の看板娘の取り合いから賭場で一悶着起る。それを安濃徳の用心棒が早とちり。一日で千両もの儲けがある荒神山の賭場は親の代から神戸の長吉の縄張りだが、その利権を安濃徳に奪わせようとする喧嘩を仕掛けたのだと勘違いした。

後に荒神山の喧嘩の発端となる事件で

あるが、きっかけとは何と些細な出来事なのだろうか。

そして前話の続きの『三本椎の木お峯の茶屋』だが、少し毛色が変わった面白い嘶だ。熊五郎が仲間と一緒に神戸の長吉の家に殴り込みをかけるが、家には長吉の母親だけしか居らず、しかも婆さんは少しも怯まずに啖阿で切り返し、熊五郎たちを追い返してしまう。熊五郎たちは「三本椎の木お峯の茶屋へ来い」と言い残した。長吉たちが帰ってきて、一行はお峯の茶屋へと向かうが、そのときに通りすがりの松蔵という子供に声を掛けられる。この子供が生意気にも助っ人に来たというのだが、宥めているうちに喧嘩がはじまった。ところが何とこの松蔵が活躍するという漫画のような内容だった。

続くは『飯田の焼き打ち』畑中の鉄五郎と鯛屋の鶴吉の二人にとって、次郎長の子分の滑栗の初五郎は目の上のたん瘤。次郎長を憎む黒駒勝蔵に殴り込みを促し、黒駒は沢山の子分を連れて初五郎宅を襲う。しかし初五郎は不在だったが、残忍にもその妻子を斬り殺した。

この話を聞いた次郎長は黒駒の行方を探す。大政を筆頭に子分十七人を畑中と鯛屋の許へ遣わす。そのとき次郎長は、

黒駒の行方を覗くだけで決して喧嘩はするな、と強く釘を刺す。しかし喧嘩は始まる。やむなく他の面々も加わると、二人を斬り殺してしまい、さらに鬼吉は家に火を放ってしまうという始末。次郎長に背いた十七人は清水に戻ることができない。仕方なく吉良の仁吉に仲裁に入ってもらおうと訪ね、仁吉もこれを引き受けるといふ。そもそも喧嘩早い鬼吉を連れて行ったのが間違いで？と思うのだが・・・そしていよいよ山場の荒神山へと続くところ今夜はお開きとなった。明日が待ち遠しい。

千穂楽 一月三十日

- ・第十五話「仁吉の離縁場」伯山
 - ・第十六話「仁吉の最期」伯山
 - ・第十七話「仁吉の焼香場」伯山
 - ・第十八話「その後の次郎長」伯山
- 早いものでとうとう五日目となり千穂楽。『仁吉の離縁場』神戸の長吉の縄張りだった荒神山の賭場を、安濃徳が自分の手に渡ったと廻状を廻す。長吉は吉良の仁吉に仲裁を頼むことにした。義理に厚い仁吉はそれを聞いて、三か月前に結婚していた安濃徳の妹お菊に離縁状を渡すのだ。そこへやって来た次郎長に仁吉

は長吉のことを話し、仁吉の義侠心に免じて子分を許し、荒神山への帯同を言いつけ「逆らう者は片っ端から叩き斬れ」と命じる。そして次郎長の子分二十七人が、仁吉と長吉の後の盾となって荒神山へ向かう…。

そしてクライマックスの間合せどころ『仁吉の最期』荒神山で待ち受ける安濃徳と角井門之助等に対し、次郎長勢二十九人が闘う。いよいよ大乱闘が始まった。しかし門之助と斬り合った仁吉が、安濃徳が雇った獵師に足を撃たれ、よろけた隙に止めを刺されてしまった。駆け付けた大政が門之助を槍で突き射し小政が斬り倒す。すると安濃徳の身内は蜘蛛の子を散らしたように去って行った。次郎長たちは骨を置いた戸板に仁吉を載せて、三州吉良へと戻った。

続くはこれまでの流れの締めで『仁吉の焼香場』神戸の長吉に頼まれての喧嘩だったが次郎長の目は誤魔化せず、皆が斬り合う中で長吉は逃げて隠れていたことが判ってしまう。仁吉の親分である寺津間之助は次郎長の許しを得て長吉を斬ろうとしたが、その時に御油の玉屋の玉吉が飛び出してきて「長吉は気弱な男。その弱さに仁吉も気付いていた筈だ」と言って、命だけは助けてほしいと願い出

る。次郎長は了承し、玉吉は長吉を追い出した。以来、長吉は渡世人の世界に姿を見せなかったという。義理人情の厚い任侠の世界からすると、なんとも情けない結末だった。

最後に新作の『その後の次郎長』時代は明治に変わり、次郎長は駿河に来た伏谷如水判事から苗字帯刀を許され道中探索方を命ぜられる。これまでの罪滅ぼしとして世の為人の為に働いた。そんな時に幕府の脱走兵が官軍に倒された感臨丸事件が起きる。海に漂う幕府方の死骸を弔うなどという官軍の命令に背き、次郎長は「仏に敵も味方もない」と丁重に埋葬した。これに感服した山岡鉄舟は墓の揮毫を申し出た。いわゆる「壮士の墓」である。以降も次郎長と鉄舟の交流が続き、次郎長は「精神満腹という度胸免状を買った」と自慢していたという。富士の裾野の開墾や船宿末廣の開業など、その後も地域に尽くしていく。という次郎長翁を知る会としては「ヨッ！待ってました」というあっぱれな話で五日間の幕が閉じた。

千種菜で嘶が盛り上がった時に、客席からスマホの着信音が鳴り響き、一瞬しらけた雰囲気となった。開演前に何度も注意のアナウンスがあったのに非常に残

念な出来事であった。

今回は初めて十八席の連続読みだったが、今後も次郎長伝を話し続け、少しずつ足して三十席にもして行きたいとの事。三代目神田伯山が創り上げた「清水次郎長伝」を神田愛山、そして師匠の神田松鯉と伝え繋ぎ、今六代目神田伯山が大きく開花させ、素晴らしい伝承芸で私たちを楽しませてくれた。最後には今後次郎長がまた盛り上がり、次郎長通り商店街にも再び賑わいが戻ります様に、三々七拍子で締め括るとい嬉しいまでの心遣いを見せてくれた。これからも、ずっとずっと「清水次郎長伝」が語り継がれ、愛されていくことを願ってやみません。

編集室から

- ・コロナ禍も落ち着き、人々の動きも活発さを取り戻しつつある中、各会・団体との交流や再会が多い一年でした。
- ・巻頭で紹介の大野コミュニティ様は、古湊の風情を残す大野町のまちを盛り上げようと奮闘中。メンバーの馬場様より季刊新聞の便りが届きます。
- ・実はこの大野町は当初研修旅行の候補地でした。道路交通法の改正による時

間制限などの理由で旅程が折り合わず見送りとなりましたが、もっと大政の事をしっかり勉強して、いつかきっと訪問を実現させたいです。

- ・今回の研修先となった遠州・磐田の旅行に於いて、塩新田・中中原の皆様への連絡や訪問予定の施設との取次ぎなど、裏方でサポートして旅を成功に導いて下さいました福田中央交流センターの木野様に深く感謝を申し上げます。

- ・咸臨丸子孫の会の皆様のご参加と、徳川家臣団大会への参加とりまじめに色々と手回しして下さいました尾駒様に厚く御礼申し上げます。

- ・次郎長翁の名のもと、清水を代表しての交流活動に今後も励んで行きたいと思えます。会員の皆様のご温かい支援とご参加を何卒よろしくお願いいたします。

次郎長翁を知る会 会報「次郎長」44号

令和7年6月1日発行

発行/編集

次郎長翁を知る会

会長 府川充宏

事務局

(公財)するが企画観光局

〒420-0837

静岡県静岡市葵区日出町1番地の2

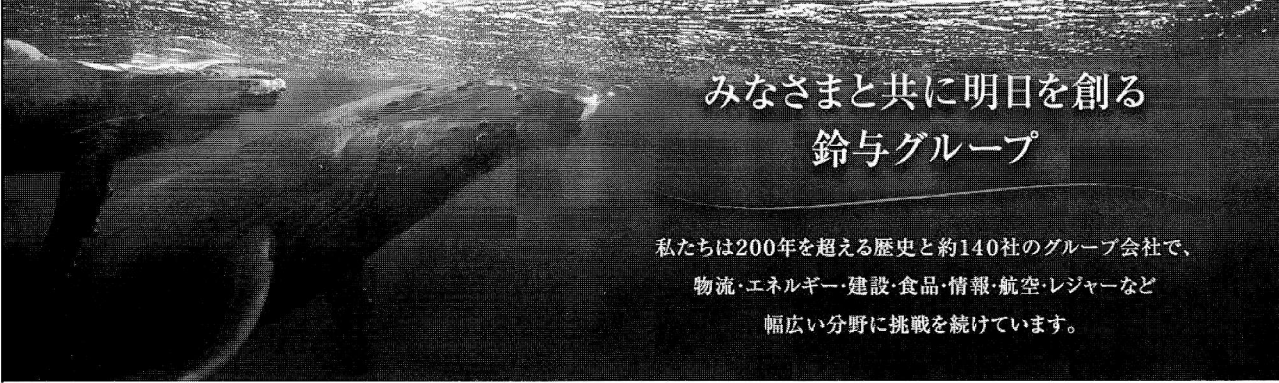
TOKAI 日出町ビル9階

Tel 054-251-5880 Fax 054-205-3639

www.jirocho.com


minowa.jirocho@gmail.com

御協賛ありがとうございます



みなさまと共に明日を創る
鈴与グループ

私たちは200年を超える歴史と約140社のグループ会社で、
物流・エネルギー・建設・食品・情報・航空・レジャーなど
幅広い分野に挑戦を続けています。



鈴与グループ

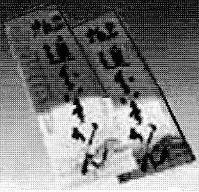
地域を愛し、お客さまの未来をともに考え、共創します




清水銀行

<https://www.shimizubank.co.jp>

創業元禄八年 東海道三百年の味 追分羊かん



東海道三百年の味  追分羊かん

江戸三代將軍家光のころ府川のあるじ箱根の山中に、旅に病める明の僧と出会いこころあたたかく介抱、
やがて病癒えたかの僧は感謝の涙とともに小豆のあつものづくりの秘法をねんごろに伝授して去った。
それがそもそもこの追分羊菓のことの発り、ひたすらな善意と素朴な感謝がいみじくも交流したところから、
この菓の風味は生れ出で、爾来三百年ひとの口にひとのこころにしみじみとしみわたってきている。

つゝましくほのぼのと いまも

詩人 長田恒雄（静岡市清水区）

